

グローバリズムと原理論（当日発表）

Principles of Political Economy under Globalism

小幡 道昭（東京大学経済学部）

司会者が整理された三つの論点にそって、報告したいと思います。『報告要旨』の1. 1が基本的に第1の論点、ポリティカル・エコノミーについての私の考え方です。ポリティカル・エコノミーという用語が由来については、お配りしたルソーの『政治経済論』やジェームス・ステュアートの『経済学原理』のいずれも冒頭で同じような見解が示されております。ポリティカルはポリス共同体を含意しています。近代政治の流れのなかでは、血縁や身分関係から自由な諸個人の形成する社会の模範をはじめギリシャのポリス共同体すなわち市民社会に求めたのですが、この市民社会が次第に経済社会として、そして、19世紀にはいると近代市民社会が市場社会へと転換され、ポリティカル・エコノミーが自立していった、ほぼ今日の経済学の意味で用いられてきたのだといわれているようです。

もちろん問題は語義の詮索ではありません。19世紀になるとさまざまな社会主義者がポリティカル・エコノミーをベースにしなが、当時の社会批判を展開し、あるべき社会像、オルタナティブの提案をするようになります。マルクスの『資本論』も、経済学批判という副題が示すように、こうした流れのなかで、古典派経済学批判を通じて、同時にこの種の社会主義者を同時に批判する面をもっていたと思います。

しかし、私がここで強調したいのはマルクスの経済学批判が真にその威力を発揮するようになったのは、マルクス自身が分析しようとした資本主義の現実が大きく変貌を遂げた次の時代においてではないか、ということです。つまり、ドイツをはじめ、後発資本主義国が本格的に発展してくる19世紀末以降、帝国主義段階への変化が決定的だったのではないかということです。この段階で、自由主義段階のいわゆる夜警国家化とは異なり、関税政策や資本輸出を巡り対外的な国家の役割が強化され、対内的にもビスマルクの社会政策など、いわゆる社会帝国主義の動向も生まれてきます。「国家や共同体、制度や慣習、イデオロギーや宗教・文化といった、非市場的な諸要因が市場に及ぼす影響に注目し」「資本主義の歴史的現実を直視し、その特殊な性格の解明に向け、総

合的な社会科学の一環として経済学を位置づける」ことが不可欠となったのです。この段階で、あるべき社会を理念的に構想する、アナキストやオーウェン派、あるいはリカード派社会主義者や労働全収権論者など、もろもろの19世紀の社会主義者たちをマルクス主義は大きくぬきこんでたと思います。また、ポリティカル・エコノミーを市場的な要因に限定して一般的な理論モデルを構成するエコノミクスに変えていった、近代経済学の流れとも一線を画し、国家や社会制度との関連を重視し、歴史的発展のうちに資本主義の現実を捉えるところに20世紀のマルクス経済学のアイデンティティが形成されたと考えます。たとえば、戦前の日本の現実を捉えようとすれば、明らかにマルクス経済学でなければだめだったのだといってよいでしょう。それは、総合的な社会科学であり、経済理論学会といっても、狭い意味での経済理論、あるいは原理論にかぎらず、財政や金融、あるいは労働や農業、自然環境や家族制度など、幅広い分野の研究者で構成されている、この学会の構成はまさにそうなっていると思います。

要するに、マルクス経済学とは何か、私の理解は、『資本論』のような原理論、資本主義の基礎理論を基礎にしながら、「多元的な社会的諸要因を関連づけてゆく総合的観点」を方法論として、資本主義の歴史的発展のうちに現れる多様性の解明する経済学である、というものです。「総合的観点」と「多様性」、これが鍵です。

さて、2番目の論点に移ります。すなわち、「現代資本主義の位置づけについて」です。私はこの点を表題の通り、とりあえずグローバリズムというかたちで考えています。ここ数年、私やもっと若い世代の研究者たちで、「マルクス経済学の現代的課題」研究会というのをつくって、現代資本主義について、いろいろ論じ合ってきました。参加者は100名をこえ、いわゆる実証研究家だけではなく、私のような原論屋もはいて、とにかく「マルクス経済学」という看板を正面に掲げてやってきたわけです。『マルクス経済学の現代的課題』というシリーズで全10冊、刊行の予定です。これは二つの部分に大きく分かれていて、前半が「グローバル資本主義」というタイトルで7冊、後半が理論編で「現代資本主義の変容と経済学」というタイトルで3冊刊行されます。理論編の第1巻「資本主義原理像の再構築」というのがもうすぐでる予定です。

話を戻すと、この研究会を通じて私たちはとりあえずグローバル資本主義というかたちで、現代資本主義を特徴づけてきたわけですが、私個人は原論屋なう

えに、気が短い方なので、『報告要旨』のなかでは極端に、グローバリズムはポスト・インペリアリズムだ、と行ってしまっております。これは私たちの共通理解ではありません。むしろ、これは帝国主義に対する特殊な捉え方が前提となっており、そこからみて現代資本主義がおおきな変質を遂げた、と認識をもつに至ったということです。この点は『報告要旨』の「1.2 帝国主義段階における資本主義の特質はどこにあるのか？」と、「1.3 グローバリズムはいかなる意味でポスト・インペリアリズムなのか？」をご覧ください。簡単にいえば、お配りしたプリントに図解したとおりです。社会主義諸国が瓦解したことよりも、そうしたなかから中国のように市場経済的な発展を遂げる国が登場したことが、より重要なのです。帝国主義段階では商品経済的關係が地理的領域の面でも、また一国経済内部の編成原理としても限定される傾向を示した。この帝国主義を特徴づける、商品経済的關係の部分性という観点からみると、グローバリズムの現実はこのいずれの面においても顕著な対立を示しているというように考えられるわけです。この意味で、インペリアリズムの対概念としてグローバリズムというものを位置づけるという、やや極端な立場にたつてとりあえず考えてみようというわけです。

ここからが本題です。グローバリズムをめぐるのは、これを資本主義の長期的な発展段階のうちにもどう位置づけるか、帝国主義段といかに関係づけるのか、この点に関して、極端に言えばまったく逆の考え方が存在することです。一つの考え方は、グローバリズムはいわば外面的には、中断していた資本主義の世界的な再拡張、内面的には市場原理主義、競争原理のリバイバルであり、固有の意味での帝国主義段階は、長い中休み、「大いなる眠り」であり、資本主義の本来のすがたが復活し、さらにアメリカナイゼーションというかたちで徹底したのだ、といった見方です。帝国主義が示した非市場的要因の強化はイレギュラーな事態で、歴史は本来の軌道に戻ったとみるものです。そうなると、これからはいよいよ、マルクスの時代だ、ということになります。実際『資本論』は、失業の累積や不安定な投機的な金融など、読みようによっては現代の事態にそのまま当てはまりそうな面もないではありません。

『資本論』にはもともと、資本主義は発展してゆくと一つのすがたにゆきつくという考え方がありました。そしてその行きついた先において、現実には内在的な矛盾が累積して、それで資本主義そのものが存続できなくなる、という考え方は、これはいわば資本主義の発展に関する収斂説といってよいのではないかと思います。そして、グローバリズムは再収斂化である、とみるわけです。

このような考え方は、したがって資本主義の自己崩壊論、それが何もしなくても機械的に自動崩壊するという誤解を生むからよくないというのであれば、危機論型の現実把握ということになると思います。20世紀の資本主義、とくに戦後の資本主義は国家の財政金融的介入や労使関係の調整制度といった、さまざまな非市場的な要因を組み込むことで柔軟な構造を具えてきた、グローバリズムはこれに対して、再び資本主義を危機の時代に押しもどしたというように考えるわけです。（戦前の資本主義は固有の意味での帝国主義で、これは本来的に危機の時代であったという疑問がでてくる可能性がある。自由主義段階から帝国主義段階への移行は、独占化というかたちで危機が深まったという考え方で、これはある意味で正当な考え方である。そして、この考え方からすると、グローバリズムは、この意味で帝国主義への復帰であり、危機であるという捉え方になると思う。宇野派の帝国主義段階論は、不純化という点に重点をおき、事実上戦後の時期までも射程においた議論になっている。大内力氏の国家独占資本主義論からその後の福祉国家論に至る一連の把握は、この流れに沿ったものといってよい。）

もう一つの考え方は、グローバリズムは帝国主義段階における資本主義の〈部分性〉の露呈、言い換えれば、国家や制度的調整などの介入という意味での非市場的な要因への依存という側面は後退したが、しかし、それは再収斂を意味するのではない、新たな意味での多様化こそがその本質だ、という見方です。収斂論に対しては、いわば多様化論をとるわけです。その意味では、帝国主義段階において現れた資本主義の多様性の側面は、グローバリズムのもとで消滅するのではなく、新たなかたちで再生、強化されているというようにみるわけです。しかし、グローバリズムはアメリカナイゼーションであり、市場原理主義による画一化である以上、どこに多様化など、でる幕があるのか、という疑問は当然かもしれません。

しかし、現実に戻って見てみましょう。すでに述べましたように、グローバリズムへの決定的な転換点は、従来、資本主義としての発展から排除されてきた地域における新たな市場経済的な発展です。中国、インド、さらには東南アジアの諸国の現実、またロシア、東欧諸国、こうした地域における市場経済的な発展は、単に資本主義諸国の外圧でやむなく受動的に資本主義の方向に押し流されたというだけではないと思います。むしろ外的な要因はありますが、内在的な転換の契機を具え、独自の発展を遂げている、これらの地域が統合されるなかで、それに規定されて日本の資本主義も、西欧の資本主義も逆に変質

を遂げている、それは次の将来社会を内包しているということができるのではないのでしょうか。そして、この地域と結びつくかたちで、ヨーロッパやあるいは東アジア、東南アジアは、アメリカとは異なる資本主義のかたちを形成する可能性もあります。

これはあくまでも現実認識の問題ですが、グローバリズム＝再収斂説に対して、グローバリズム＝再多様化説も可能性なのではないかと思わせます。問題は、このような再多様化という考え方をした場合、従来の原理論の方法、これには理論を展開する方法という側面と、それを現実はどう適用するかという方法という両面がありますが、この点が原論研究者としての私にとっては最大の興味なのです。そして、「マルクス経済学の現代的課題」という研究会のなかでも、実証研究者と意見を交わしながら、多少考えを進めてきました。私の当面の結論は次のようなものです。

これまで、帝国主義段階における資本主義の多様性はどのように捉えられてきたか、この点をまず振り返っておきます。簡単にいえば、資本主義は本来一つの純粹像をもつと考え、それとの対比で、現実の資本主義の多様性は整理し、位置づけることができる、というものではないのでしょうか。これとの対比で、本来の資本主義との距離ははかられる。そして、帝国主義段階において現実の資本主義の発展は、この純粹像からかけ離れたものになっていったと見なされるわけです。

しかし、このような単一の資本主義像では、グローバリズムのもとでの新たな多様化が理論的に捉えにくくなるのではないか、というのが私の懸念です。ある意味では、資本主義は帝国主義段階においては、一貫して非市場的な要因で、そのずれ方はいろいろあるにせよ、原理像からずれていることになりま

す。あるいはその裏返しで、グローバリズムを自由主義段階との連続面で捉える、そこに逆流しているというように考えるか、19世紀のイギリス資本主義は市場原理主義という点では不徹底であったのであり、アメリカ資本主義こそ、原理像に近いものになっているのだと考えるか、いろいろあるとは思いますが、要するにグローバリズムを強調すると、再収斂説になってしまうのです。

しかし、グローバリズムはすでに述べたような意味で、二重に帝国主義段階と区別されるとなるとどうなるか、多様性といっても、その多様性のあり方を大

きく区別する理論的観点がさらに必要なのではないか、これが『報告要旨』のなかで、類型論的アプローチに替わる変容論的アプローチが必要なのではないか、といった問題なのです。

一つの答え方は、資本主義の原理像は一つであるという考え方を見直してみることです。むろん、現象を捉えて何とか資本主義という適当なラベルをはって区別するのは、資本主義にもいろいろなタイプがあるという類型化であり、理論といってもそれぞれの時代に即応したものがいくつもある、というところに後退してしまいます。私自身は、資本主義が多様化するのとはなぜか、という問題に対して、原理像自身には多様化は関係ないのであり、非市場的な要因にその原因はすべてあるのだ、というようには考えないで、原理像のうちに多様化する契機を探ってはどうかと考えています。資本主義自身が自らのかたちを一つにしない要因を抱えている、それはたとえば、『報告要旨』でふれたような論点、「資本主義にとって、次のものはどこまで必然的なのか、問うてみるとよい。たとえば、金貨幣は資本主義にとってどこまで不可避なものか、機械制大工業は、単純労働は、個人資本家は、単一発券銀行は、近代的土地所有は、あるいは激発性恐慌や周期的景気循環はどうか、等々。原理論では、労働力の商品化といった、資本主義であるかぎり変わらぬ一般的条件のみが前提されているだけではない」と考えるているわけです。こうした外的な条件は、それ自身密接に関連して、資本主義の像を変容させてゆきます。自由主義段階の資本主義が、あるいは現代のアメリカ資本主義が、もっとも原理像に近いというようなわけではありません。こうしたいくつかの外的条件の存在は、資本主義の岩盤の上に異なる地形を生成することになると考えているのです。『報告要旨』にある変容論的アプローチというのはこのような考え方です。

このような答え方をすることで、はじめてグローバリズムをインペリアリズムから区別しながら、しかも、グローバリズムを独自の多様化として捉えることができるかと私は考えています。必要なのは、現実の資本主義はそれぞれ多様に多様なのだ、といって終わりにするのではなく、その現実の多様性を大きく整理できる理論なのです。このようにして捉えられるグローバリズムにおける多様性の特徴は、一言でいえば『報告要旨』の「3.1 グローバリズムは資本主義の収斂性を意味するものなのか？」に「逆走的な二重運動」と書いた真意です。

ということなのですが、これは若気の至りで、さらに考えるべき点を多く残し

ています。またこの点は、そもそもグローバリズムをどう位置づけるかという問題からいえば、再多様化説に立った場合の、ローカルな問題に過ぎないかもしれません。もし議論がこのローカルな論点に及べば、もっと詳しくお話ししたいと思いますが、グローバルな分岐は、グローバリズムは再収斂説でゆくべきか、再多様仮説でゆくべきか、この点にあります。あえて変容論的アプローチなどといわなくても、類型論的アプローチでも、再多様化説を基礎づけることができるのであれば、当面私もそれでよいのです。

さて、最後の論点、つまりオールタナティブの問題について私の考えをまとめてみます。これは『報告要旨』の3.2や3.3のところで述べてありますが、圧縮されすぎていて意味不明かと思しますので多少敷衍してみます。私の観点から図式化すると、お配りしたプリントで図解したように、グローバリズムの現実直面するなかで、大きくいって二つ、もう少し分けすれば四つの方向があるようにみえます。

第1の方向は、マルクス主義の基本的な考え方を維持し、資本主義の歴史的発展のうちにその限界を指摘し、そこから次の社会への移行の必然性を論じる立場です。したがって、それは現実に対するオールタナティブを提示し選択をせまったり、あるいはさまざまな部分的な改良政策を提言したりするという行き方には無関心、あるいは戦略的には拒否するという立場になるでしょう。

これはマルクス主義の少なくとも本来の行き方であろうと思います。『資本論』自身、こうしたかたちの内部崩壊論的な説明が中心になっているといつてよいと私自身は解釈しています。資本主義はその本来の発展のうちにその限界をかかえているとみるわけで、崩壊論というのが受動的すぎるというのであれば、危機論といってもいいでしょう。これはすでにふれたようにグローバリズムを再収斂とみる立場として、今日復活しています。

これと一面で対立しながらも基本的には次のオールタナティブ論に対して鋭く対峙するという点では共通性を有するものに、帝国主義段階を多様化説で説明して、多様化＝腐朽論、ないし不純化＝没落論という立場があると私は考えています。これは、資本主義はその本来のすがたに存立を不可能にする限界があるのではなく、逆に現実がそうなりきれないところに、つまり原理像から乖離せざるをえなくなったところに限界があるとみる立場です。これはたしかに、20世紀の資本主義の現実を多様化として捉えながら、それに対して客観主義的

な立場でその限界を新たに定式化したものといっていると思います。

ただし一言付け加えておこなら、没落論は必ずしも崩壊論や危機論のような強い必然性を主張するものではありません。資本主義が没落期にあるということは、ある意味では歴史的現実に対する主体の〈評価〉を含んでいます。それはそのまま、危機、崩壊、社会主義の必然性という一方向に進むのではなく、この没落期の歴史的な分析をふまえ、社会的な主体がそれに対してどう判断し行動するか、この点が歴史的な変化の重要な契機となることを強調する面も含まれていました。この違いはおそらく、同じく客観主義というマルクス主義の基本にたちながらも、収斂、一様化とは異なる、多様化論をベースにしていることによるのでしょう。

さて、このようなマルクス主義の客観主義が、グローバリズムの現実に真に対応できるものか、とりわけ、グローバリズムの台頭と同時並行的に進んだ20世紀の社会主義の変質・瓦解を直視すると、単に資本主義の行きづまりを批判しているだけではだめなのであり、資本主義とともに、20世紀の社会主義の限界をもこえる、新たなオルタナティブを提起しなくてはならない、という主張が当然でてくるわけです。第2の主体的な現実改革の立場が強まっていると思います。私は、ここにも、密接に関連はしていますが、二つの流れがあるように思います。

その一つは、市場社会主義であり、私はアナキズムの再販だと理解していません。市場社会主義という場合、計画経済が挫折したためにやむなく次善策として、市場を部分的に利用しようという消極的な立場も含まれるのかもしれませんが。これに対して、本来、市場を自由と平等とを実現する、人間社会の組織原理として理念化する立場があります。国家による統制、規制、干渉をことごとく権威の強化につながるものと見なし、国家なき社会、無政府の社会を構想するアナキズムの流れがある。アナキズムは市場が本来のすがたからみてゆがんでいる、例えば金属貨幣による交換力の独占、国家の権威に結びついた貨幣などを批判し、労働貨幣による商品と貨幣の平等化、国家による貨幣統制の地域通貨への転換、エージングマネーへの導入、無償信用など、さまざまな市場の変革を提唱するのですが、そうしたかたちで生まれかわった市場を否定することはありません。それは市場が本来国家や権威に代わって自由・平等な社会編成の原理として市場を理念化する、生粋の市場社会主義、ネオ・アナキズムです。

もう一つの流れは、これと連動しますが、いわゆる規範理論の立場からする資本主義のオルタナティブ論です。自由と平等に関して、あるいは効率と分配の公正（搾取批判）に関して、基本的な規範のあいだの関連を分析的に解明し、さまざまな規範の構成で〈あるべき社会像〉を構成したり、あるいは現実を判断したりしようというのではないかと思います。これは社会主義を市場の否定、計画化として捉えてきたソビエト型の社会主義に対して、それに替わるあるべき社会主義像を再構成しなくてはならない、それを怠るかぎり、いくら現実の危機を客観主義で唱えてももはや影響力はないという考えによるでしょう。そしてまた、アナーキズムの市場社会主義が注目されるなかで、それが如何なる意味で市場原理主義者のそれと異なるのか、いわば社会像と位相の差を説明するためにも必要とされているのではないかと、思います。

私はおよそ以上のように、グローバリズムのもとで、資本主義を批判する立場の基本的な枠組みを整理しております。すなわち、マルクス主義本来の客観主義をベースとした危機論と没落論、これに対してグローバリズムの現実のなかであるべき社会像を提示し批判するオルタナティブ論の分岐です。

これをふまえて最後に、私の立場を述べてみることにします。私は従来 of 危機論にはたちません。それは理論的な理由によるものです。また、没落論に対しても距離をとっています。帝国主義段階と区別したかたちでグローバリズムを考えるとということは、帝国主義段階を没落期と規定した立場を見直すということの意味しているからです。

では、オルタナティブ論を支持するのか、ということになります。『報告要旨』で、私の立場があるいは、アナーキズムや規範理論に「近似してみえるかもしれない」と書いたことです。しかし、私はこの種のオルタナティブ論は、マルクスによってすでにのりこえられたのではないかと考えています。原理論研究者としてみると、アナーキズムの資本主義理解、市場の無政府性、搾取なき市場の可能性、みな『資本論』で批判されているところです。また、規範理論も歴史的な現実の発展をこえて、人間のあるべき理念から社会像を一般的に構想する立場は、アナーキズム以前の次元で、近代政治思想に対するマルクスの批判、マルクスの唯物史観やイデオロギー論のなかで、明確にのりこえられた啓蒙主義でしかないと思います。

私はその意味で、第一の危機論や没落論にもそのまま与することはできませんが、それ以上に、第二のオールタナティブ論に対してはそれ以上に距離をおきます。そしてとりあえず、つぎのようような立場を考えています。将来社会は、いかなる意味でも理念から導きだされるような、〈あるべき社会像〉として構想されるべきものではなく、資本主義の歴史的現実から展望していかなくてはならない、グローバリズムの現実のなかに現れつつある動きのうちに将来社会につながる萌芽を見いだし、それを支持するべきなのであると。とりわけ、多様化にも二つの段階があるということを知ったいま、ポスト・インペリアルリズムとしてのグローバリズムの多様性を考えるとすれば、資本主義と社会主義という境界線は原理的に引かれるものではないということ強く意識して、あらためて次の社会は漸進的に展望すべきだと考えております。（以上）

再収斂説、危機説にはたたない。ということは、規範理論かということ、これとも違う。オールタナティブ論の啓蒙主義。人間本質論が先にあり、その現実化として、理念的社会を構想する。規範理論も没イデオロギー論という限界。抽象的な、自由、平等、博愛の普遍化。しかし、人間とは歴史的な諸関係の総体である。負荷なき主体の虚妄。

では、どうするのか。資本主義といっても、現実の資本主義は多様である。社会主義との間にも、決定的な一線をいま画すことはできない。多様な資本主義とそして社会主義。クリーピング・ソーシャリズム、それは実は、自動崩壊論とよく似ている。主体の価値評価と判断を解することになしに、資本主義はいつの間にか資本主義でなくなる、という話だという点では。

危機論にはたたないが、かといって、オールタナティブを提示するべきだとも考えない。歴史的に多様に変化する現実に対して、正確な分析をおこなうと同時に、それに対して、価値判断をおこなっていく必要性を認める。しかし、これは一般的な基準があるわけではない。人間の社会的な判断がいかになされるのか、その合意形成の基本的な原理はどのようなものか、この点については、考察を進める必要がある。ある意味では、問題は再び、マルクスの時代に戻っている。近代政治思想批判としてのポリティカル・エコノミーの意味。ポリティカル・エコノミーに依拠した社会主義のオールタナティブ論に対するマルクスの唯物史観。客観主義、科学主義への展開とその限界。あらためて、物象化論、イデオロギー論の意味